

# 妙高山と岡倉天心



やまもと えつお  
山本 悦夫  
（アジア文化造形学会会長）

一昨日、赤倉温泉に行ってきた。赤倉温泉には、美しい小さな池のある庭の中に岡倉天心の寓居跡が残っている。付近に墓石もあるこの場所を岡倉天心顕彰会の方々が丁寧に案内してくださった。

岡倉天心の父親は福井県の藩士だったが、福井藩が横浜に開いた商館石川屋（横浜開港記念館）で生糸貿易商を始めた。天心は、その商店の角倉で生まれたことから覚三と名付けられた。彼は、終生、岡倉覚三（Okakura

Kakuzo）という名で通し、岡倉天心と呼ばれたのは没後のことのようにだ。

岡倉天心は、明治の人である。その著書『The book of Tea』（『茶の本』）や、その他の著書、活動などを通して、日本や東洋の美術、文化を欧米に広く紹介した最初の日本人といってもよいだろう。

一八九〇年（明治二十三年）、岡倉天心二十七歳の時に、「東京美術学校（現東京芸術大学美術学部）」の事実上の校長となった。

その時の副校長がアーネスト・フェノロサであり、そこから横山大観、下村観山、菱田春草などが育っていった。

一八九八年（明治三十一年）「東京美術学校」辞職後、「日本美術院」を東京谷中に発足させた。一九〇一年―二年（明治三十四―三十五年）とインドを訪れ、ノーベル賞作家で詩人のタゴールやヒンズー教を世界に知らしめたヴィヴェンカーナンドなどの交流を始めた。

一九〇六年（明治三十九年）、レンブラントなど画家の集うフランスのバルビゾンにならって、太平洋の海浜、陽光あふれる茨城の五浦に「日本美術院」を移した。一九一〇年（明治四十三年）にボストン美術館の中国・日本美術部長に就任した。『The book of Tea』

（『茶の本』）は、在職中にニューヨークの出版社から刊行されたのだ。

明治三十九年には、五浦の他に赤倉温泉にも別荘を建てた。天心は「日本美術院」をこの地に移そうと提案したが、東京からあまりにも遠いという理由で弟子たちが反対した。

岡倉天心が「日本美術院」を慣れた関東から辺鄙な新潟の赤倉に移転しようと主張した理由は、明らかではないが、私は、湯治場であることが主なる理由ではなく、ここに妙高山があったからだと推察する。

妙高山はシヌメール山の意訳であり、ヒンドゥー教、ジャイナ教、仏教の宇宙論では、世界の中心に聳える神聖な山として、すべての物理的、形而上学的、精神的な宇宙の中心

と考えられている。天心はそれを理解して、いたのに違いない。(拙著『鳥と蛇の神話』西亜文庫刊、参照)

一九一二年(大正元年)夏、天心は、インドで、タゴールの親戚にあたる女流詩人プリヤンバダ・デーヴィー・バネルジー(一八七一年―一九三五)と出会い、亡くなるまで愛の書簡とも言える往復書簡を交わしたことをみても、天心のインドに対する思いが察せられるのである。(『宝石の声なる人に』平凡社ライブラリー刊、参照)

岡倉天心の別荘近くには六角堂が建っていた。六角堂は妙高山を連想させ、そしてその先に妙高山が遠望できる。……私には天心がここに六角堂を建てた心中が察せられた。岡倉天心史跡の維持のために土地の方々が献身

的に勤勞奉仕をしていられる姿も感動的であった。

岡倉天心の遺志を継いで、この地を日本文化、さらにはアジア文化を世界に向かって発信する基地とする。そして中山恭子氏が提唱される「文化のプラットフォームとしての日本」構想と連動して啓蒙運動を展開することが出来ないだろうか、と私は考えた。これは、私の属する「アジア文化造形学会」の目指す目的とも調和しているのである。

■やまもと・えつお  
アジア文化造形学会会長、環太平洋アジア交流協会理事、シルクロード文庫(シルクロード研究所)発起人、メディアアウオッチ(メディア研究所) 神話・古代史担当主幹、「西亜文庫」編集発行人、「四人」編集発行人

情報の交叉点

―編集室―

心の痛むお知らせをいただきました。竹村健一先生の次男である竹村英二先生が57歳の若いお年で2月15日に旅立ちをされました。心よりお悔やみを申し上げます。思想史学や国際歴史学の研究に取り組み、カレント誌では第794号(平成22年10月号)「カレント・インタビュー」で対談をしていただきました。まさに残念なことと心に問いかけると共に、対談でお話いただいた近代日本人の基盤をなした考証学のことか思い出されます。論理の推移や結論への移行をなすことが迫り着くことは、世界196カ国を点、線、面、球の理論を遂行すると世界は一つという世界観に到達する結びが生まれるのです。カントの言葉、それを考えることのしばしばにして且つ長ければ長いほど賞嘆と崇敬の念に満たされるものが二つある、それは天に輝く星とわが内なる道徳律である。まさに心に刻まれるのです。

【表紙絵説明】

凜として

たむらのりこ  
田村能里子

福岡女子大学 学生会館  
(福岡県福岡市東区) 2013年

●田村能里子(たむらのりこ) 略歴

- 一九四四年、愛知県生まれ。
- 一九六六年、武蔵野美術大学油絵美術専修科卒業。
- 一九六九年から四年間、インドに滞在し大地に生きる人々を描く。
- 一九八六年、文化庁芸術家在外研修員として北京中央美術学院に留学。
- 一九八八年、中国・西安のホテル「唐華賓館」を第一作目として、中山競馬場、客船「飛鳥」、横浜コンサートホール、名古屋セントラルタワーズ、青梅慶友病院、テルモ株式会社、銀座のファンケルスクエア、日本橋高島屋特別食堂入口など、壁画・障壁画など六十三作を制作。
- 昭和会展優秀賞、日本青年画家展優秀賞、前田寛治大賞展佳作賞などを受賞。
- 一九八九年、中国政府より壁画作品に対し軒轅杯国際特別賞受賞。
- 一九九五年から三年間タイ(バンコク)に滞在、アジアの風土をモチーフとした制作を続ける。
- 著書・エッセイ集「陽だまりの女たち」画文集「女ひとりシルクロード」を描く、「風と沙と女たち」。